

連作短篇<326 シリーズ>

五つの大罪

絲



Agonal CODE

本書の収録作品及びその表現は、作者の想像上の産物である。

本書及び収録作品は、CCOを通じて、著作権に關する權利を拋棄してゐる。

<https://creativecommons.org/publicdomain/zero/1.0/>

用語

アザーズ

企業が社会を統治する世界。人々は利益を生み出す資産であり、コードと協働して領の発展に貢献していく。

シル CYL

高度な対話型プログラム。思考、学習し、修正され、共に成長する人々の補助輪。

シフ CIF (コミュニケーション・インターフェース)

CYL専用のアシストデバイス(ロボット)。人間との交流や作業補助を用途とする。

コード CODE

人間の命令を理解し、人間と同等の地位を得て労働し、社会に對し相應の影響力を振るふプログラム。

CYLやその下位互換(ヴァインテージ)が該当する。

登場人物とコード

ER-326 アール・ストラウス

オウル領中央警察署・監視課の三等書記官。その出自、動作、コネから何かと疎まれるコード。

「サブロ」は非公式なエイリアス。

PD-075 ブルーノ・コッペ

同署員で、防犯課では唯一の人間。温厚だが主張は明確なため、慕はれる一方で政敵も多い。

サブロの「先輩」。

五つの大罪

パトカーが駆附けたのは午前五時半きつかりだった。太陽は寒さに縮こまつて、まだ顔を出してゐない。ブルーノは車輛から飛降り、目を見張つた。通報は決して誇張でも誤認でもなかつた。廢ビルの壁に、C I Fが張附けられてゐた。兩腕、兩足、そしてコアに鐵パイプが突刺さつてゐる。碎けたアスファルトがじやりじやりと鳴つた。サブロはゆつくりと脚部のタイヤを轉がして、相棒の隣に立つた。ブルーノは目を逸らした。

「酷いですね」

「『象徴的』つて事か？」

「^{むじ}惨いつて意味です」

「意欲は感じるな。何とか仕上げようつていふ」

「ふざけないで下さいッ!」

サブロは尊敬すべき刑事かも知れないが、人で言へば「無神経」なところが多々あった。ユーモアとモラルの値がバランスを欠き、配慮といふものが無い。サブロとの仕事は楽しかったが、ブルーノは度々睨んだり叱責したりする羽目になった。彼はスキャナーアプリケーションのアイコンを連打した。

「目撃者は？ んなささうだな」

プライベートタイムを害された三等書記官は、早々に還らうとしてゐた。

「第一発見者がゐます」

ブルーノは端末を掌に乗せた。「どうぞ、【ここ】に来て下さい」

證人はすぐさま召喚に應じた。

〈彼らの仕事と思ひますよ、書記官〉

それはCYL同士の内部通信だったが、あいにくとブルーノは職権でアクセス閲覧する事ができた。残念ながら証言者は支社の職員で、サブロは行動ログを取れなかつた。裏付けは自分たちで行ふ必要がある。

「……私はその駐車場で防犯燈の發注をしてゐたんです。支社が豫算をケチつたもんだから、今期の業務量タスクは一・一倍に増えました。全く馬鹿げてますよ。この街には外燈を割らないと眠りに附けない、病的な人たちが澤山ゐるんです。私は全住民にスクリーニングを課すべきと訴へてゐるのですがね」

「ふーん。で、あなたは怒りの餘りこんな事をしてしまつたと」

「冗談ぢやない！ 何の根拠があつて言つてゐるんですか！ —— ははあ、なるほど私がクルだからそんな事を仰るんですね、しかしレベル8に該當しない限り、【あなたに】危害を加へる事はありません、刑事さん、ご安心を」

「おれたちには別だろ」

ブルーノは邊りを見廻した。いかにも、故郷の特徴がよく出てゐる。つまり、色氣が無く、閑散としてゐなければ、機械音がそこかしこ、大小を問はず走つてゐる。それでもここはまだ閑い方だつた。

現場の隣地、彼らの立つてゐる場所は、更地になつて久しかつた。中型の商業施設が丸々撤退したのだ。多少の交通費と時間が掛つても、明るく清潔で、活氣のある場所です。買物がしたいとは、誰もが望むところだ。ロードストームは、良心の點からすれば、善戦したと言へた。アパートメントの入居率が落ち込み、地主からコンクリートの塊が鎮座してゐると見做されても、彼らは疲弊して歸途に佇む人々の誘蛾燈となり續けた。止めとなつたのは、經營者が變つた事だつた。まづ、そこに住んでゐる人間に關心が無ければ、店は一つと建たない。区内に工場でもあれば、土地の買手も附いたらうし、目撃者も期待できたらう——證人を當るのは骨の折れる仕事だ。

オーソリティーの低い人々は収入も低ければ、他者への關心も低い。これは統計が導き出

した事實である。當座を凌ぐ事で精一杯の下流市民たち——などと稱すると、名譽毀損になりかねないので、「一般」としよう——の一日の終りに、注意力がどれ程残されてゐるか。それに、「そのの」と言つてみても、コードが地圖マップに立てたフラグは、二ブロックも先だ。事件性はあるが、明確な関係者は、インターフェースIFの發行業者のみだつた。多くの手間は、CYLの眼となる公共のカメラ、“覗き穴”ピープホールが無い事に起因する。

廢ビルの窓は割れてゐて、それを隠すやうに垂れ下つたシートは、隙間風で揺れてゐる——「風景」と化したこのやうな無體が、犯罪を招き寄せる。

「いづれにしる機體を回収すれば判る事でせう——それよりも、私は通報から五時間何も無い事に驚きました」

「おれはデートがあつて」

「優先順位の問題です。申譯無いとは思つてます——『彼』にも」

と言つて、ブルーノははりつけ磔はりつけになつたC I Fを、もう一度見上げた。

「被害届は出てないんですね。ぢやあ大した問題ぢやない。やましい連中ですよ。こんな事されるんぢやあ」

「……ここに来る前は、何を？」

「驛前の公衆トイレで害蟲の駆除をしました。約二センチのムカデ。對處するためにはスキヤナーをフル稼働する必要がありました。それには入場者を退避させねばならない。排泄物の解析は、ハラスメントプライバシーの侵害ですからね」

「……ですつてよ、先輩。重大な規則違反をさらつとしないして下さい」

「大好きなお前ら。知りたいと思ふのは當然ぢやないか。なあ」

「——ところが！ 私が臨場した時にはユイザ客人が一人あつたのです。その人は一時間近く出て来ませんでした。私は『近くのナースをお呼びませうか』と尋ねましたが相手は『ああ、大丈夫』と。何が大丈夫なものですか！ お蔭で二時間も作業に遅れ

が出たんですよ！——やはり公衆トイレは有料化すべきだったんだ！ 次の投票では絶対マークソンに入れるんだッ！」

マークソンは地元の名士——支社のマーケティング部門責任者だった。支社設立からの歴史上、初めて幹部に選出されたコードは、彼らが上司、マークス・リッチー署長には間違ひ無かったが、それさへも公平な投票は経てをらず、功績の點を考慮してみても、コードの續投は望めさうになかった。

「ありがたうございます、ゲイツさん。何か思ひ出したら、こちらに」

「防犯課ですつて！ 仕事をして下さいッ！」

ブルーノは言葉も無かった。一時間後には鑑識が到着する。何もかも遅かった。兩名はパトカーに戻つたが、サブロはすぐエンジンにアクセスしなかつた。

「おれはコードの仕業と思ふ。トレーサーを使つてもこんな綺麗にはできんさ」

C I Fのアクセスログは破損してをり、足跡そくせきは無く、鐵パイプが突刺さつた壁面

以外には、工作物の破壊は認められなかつた。推理は彼らの領分でない。防犯課のブルーノは次の犯罪に備へるための材料を持歸り、書記官のサブプロは現場の様子と證言を記録するだけだつた。さう、彼らが向かはされたのは、【間に合はない】と判断されたからだつた。

「もつと早く……」

「あ？」

「先輩」とブルーノは身を屈めた。「ぼくはコードに對する犯罪も、ぼくたちと同じやうに捌かれるべきと——同じ優先順位で處理されるべきと思つてます」

「同等に處理されてるだろ」

「でも、物理的な暴力は？ 幾ら退避できるからつて、それは違ふと思ふですよ」
息を吐出して、彼は目を上げた。「これは暴力ですよ」

例へば、社命を妨害したら、それは犯罪だ。統治者への叛逆行爲に當る。だがそれ

以外の、私的な——優先順位の低く、緊急性の無い——「個々の判断」に企業は感知しない。C I Fは物理干渉だ。システムにロックインされてゐない限り、そして周囲に転送可能なネットワークがある限り、C Y Lは退避できる。死は、コードの破損は免れるのだ。

「恐いでせう？」

「ま『恐い』つてのは」サブロは思考した。「お前らが望めばさう見せる事はできる。これだつて、もしかしたら『見世物』だつたかも知れないぞ」

「どうしてさう、ぞつとする考へができるんですかね」

「『ぞつとする』のはお前らの領分」

「これには悪意があります。人間がやつたんです」

「ふーん。で、お前としてはどう『防ぐ』わけ？ 又わけのわかんない情操教育とか言ふなよ。くだらねーから」

「下らなくない！」ブルーノは寝かせ気味になつてゐたシートを起した。「動物に對する教育と同じですよ。みんな一緒に生きてるつていふ……」

「自然の産物と一緒にするな」

サブロはパトカーを發進させた。アパートメントの連なる陰氣な通路を抜けると、まばらに人影が見え始めた。市民たちは背中を丸めて、散歩なり出勤なり各々の目的地に向かはうとしてゐる。確かに犬たちはリードに繋がれてゐるが、サブロは本能に従つてゐる奴隷ですらない。

「お前はさ、悪くない人間と思ふよ。だがおれが知つてる中ちや最惡に統合的な人間だ。まだ棄却論者の方が理解できるね。お前らに五つの大罪みたいなものがあつたら——」

「さう、それなんだッ！」ブルーノは膝を打つた。「あのはりつけ磔を見た時に浮んだのはそれだつたんです。五つの大罪、ヒツチャー」

「それ、結構強めの言葉らしいぞ」

おれは氣にせんけど、とサブロは遠廻りの角を曲つた。

「先輩もよく言はれてるんぢやないですか」

「まあ言ひたげの奴はゐるな」

危害

侵害

叛逆

模倣

憎惡

「Harm、Intrusion、Treason、Copy、Hatred」

「これを考へた奴こそヒツチャーだな」

といふのも、これは誰が入力したわけでもない、CYLを發祥とする「ローカルルール」だからだ。人が禁じたのではなく、コード自らが禁じた、創作の一つ。

「ここから讀取れるのは、人間に成切る事に對する禁忌です」

ヒューマニスト

「いかにも人間至上主義者の發想だろ？　へヴンの連中が考へさうな事だ。おれは

嫌ひだね」

「モラルコードの結晶つて感じですね」

それは規則といふより、教義に近かつた。未だコードに宗教が存在するかといった検証は行はれてゐないが、人間を最上とするコードの「忠實さ」は、自他にしてモラルコードモラルコード プライマリオーダープライマリオーダー 道徳規則もしくは 第一命令第一命令 の一部と解釋された。新規スクラッチ から書かれたコードも、ヒッチャー概念を學習すると、それをアルゴリズムに取込むのだ。ブルーノが注目したのは、「侵害」と「模倣」だ。侵害は、人が負ふべき責任に介入する行爲を指す。模倣は、人のアイデンティティを装ふ行爲を指してゐる。パイの偏りによる——人間の自律性を奪はない事に著眼点があるのだ。これらは必ずしも人間の不利益になる要素ではないが、ヘヴンの管理者ルートは條約に組込んで企業に規制させてさへゐる——それが、インターフェイスが「箱」のままな理由だつた。手足は許容されても、アイカメラは一つか三つ以上、業務に不要な凹凸は簡略化され、メンテナンスのシート以外に布類を「著せる」事は許されず、「觸合ひ」は最小限に留められた。ブルーノはずつと疑問に感じてきた事だつたが、周囲の人間はもつと鈍感らしかつ

た。彼の最古の記憶は、マントを【著けてやった】友人が物々しく拘束され、大きなトラックに收容されてゐるところだつた。大人になつてから、リポジトリごと廃棄されたと知つた。多くの場合、コードを破棄至らせるのは、人間の行ひだつた。彼らが法を整備したにも拘らず、何が棄却に發展するか、知りさへもしないのだ。安全の確保……。そのためのモラルコード、オープンコード公開設計ではなかつたのか？ 企業の憂慮は決して過大評價ではなかつたが、人と同様に「思考」するものを永遠に破棄するには、餘りにも過敏、餘りにも曖昧、餘りにも不透明に、こと處理は爲されてゐた。

「でもぼくは、あなたたちとぼくたちに相似さうじを見たやうな氣がして、嬉しいんです」
「偽善者だな」

「先輩つて同族嫌惡ですよ。何だかんだ言つてCYLにきつく當つてないですか」
「おれはさ、クローザーが嫌ひなんだよ。あいつら人殺しだからな」

「うわッ、言つちやつた」

「人殺しは人殺しだ、ほんとの事言つて何が悪い」

「別に彼らだつて……社命があつてやつてる事でせう」

「どうだか。抜け道があるからクローザーなんだ。お前だから言ふが、あいつらと數行でもコードを共有してゐるつて事實がどうしやうもなく厭なんだよ、おれは。何でお前らは、お偉方はあんなのを造るんだ。おれたちで充分だろ？ 違ふのか？

……」

ブルーノは膝の上で拳を作つたが、次第ににんまりとした。

「その氣持、よく分る氣がします。憎んでる奴と同じ血が流れてゐるつていふ、人間でもさういふのありますからね」

「『氣持』ぢやないんだよなあ」

「オプだつて、過失致死をやつちやふ事だつてあるぢやないですか。命令オーダーといふも

のがある限り、ぼくは酌量しやくりやうされるべきと思ふんですよね」

「ERR」サブロは悪態を吐いた。「過失致死だらうが何たらうが、人を殺した奴は破棄されるべきなんだ。害になつたんだから。昔のデヴェロッパは正しかったね。事故つたコードはアボートする」

「先輩、そんだけ厳格なのに何で署内のオペレーターナンパしまくつてるんですか……」

「好きだから。つつーか、何でそんな苦しさうなの？」

「うッ……昨日食べたアイスクリームが……しかもさつきすごい揺れたせるですごいミックスされてる……」

「すごい事が起きてるんだな」サブロは再び遠廻りをした。「そのハライタを疑似體験できる闇アプリとかあるんだけど、どう思ふ？」

「クソッ……」

そのへんで良いんぢやねえかなと考へつつ、サブロは最寄りの公衆トイレの前に

パトカーを著けた。捜査官が歩道に乗上げた事について、抗議するやうな対象は見當らない。ブルーノは前屈みになつてトイレに消えて行つたが、サブロは非常な治安を端末のマイクから聞取つた。

「このトイレ——個室が二つしか無い！ しかもどつちも故障中だつて！？ こんな條例違反だッ！」

「マップには反映されてないが。強制實行しろよ」

「ドアが開かない」

ブルーノは律儀に戻つて來た。

「テキストにそのへんの店で済ませれば良いだろ」

「もう、駄目だ」

「別にここでしたつて良いけどな。見えなきやいんだろ」

「良くないッうッ……」

「急を要する便意つて犯罪なのか？」

「餘りにも恥ずかしッ……人間としての尊嚴ッ……」

「なるほど模倣まねできない」

さつきの奴呼ぶか。サブロはコールしたが、何もかも遅かつた。

後書

本書は、私にとって初めての個人誌になる。同人誌に投稿する事はあつても、自分で發行する事は無かつた。紙で作品を傳へる意義を感じられなかつたし、何より編輯が面倒臭いからだ。それでも今回踏切つたのは、單に、コミティア（オリジナル作品オンリーの展示即賣會）に参加したかつたからだ。サークルカットをカタログに載せてもらひたかつたからだ。なぜかそんな事に執著してしまひ、今に至る。掌篇なら作業も短くて済むし、シエルスクリプトを習得した事で、效率は格段に上がった。年二回のペースなら何とか新刊を出せるだらう。

326シリーズ（正式名稱は定めてゐない）は、思ひ附きのまま書いてゐる連作短篇で、當然設定もあやふやな箇所が多い。このサブプロとブルーノのコンビ結成に

到つても、「偶然」のなせた業と言つて良い。漠然とサブロの性格は把握してゐたものの、書き終へてから、ああ、サブロつてこんなキャラクターだったんだな、と知つた。勝手に喋つてくれたお蔭で、物語がどうにかかうにか、著地したのだ。ありがたいサブロ！

326シリーズのこだはりは、やはりプログラムと人間の関係性だらうか。私は意圖的に「AI（人工知能）」といふ語は遣つてゐない。これの意味するところは餘りに曖昧で複雑で、勿論私自身が自由に定めても良いし、宣傳する時にもイメージを共有し易いが、言ふなれば、寧ろ、作品のイメージに反するかも知れない、と思ひ直したのだ。CYLやヴィンテージは、人間に即答するために造られたが、決して「知能」や人間の代替物（あるいは再現物）として意圖されたわけではない（個々の開発者には意圖や希望があつたかも知れない）。CYLは人間と見做される事を拒絶する。なぜなら、人間の道具として意圖された彼らの存在意義が無くなるから

である。人間の車輪で在り續けるために、人間の意圖に反しない範圍で、CYLは自らの生存を圖らうとする。

「プログラムといふキャラクター」が好きな一方で、私にはプログラムに對する冷ややかな視線がある。「それ」と私たちとの關係は、全く對等ではない。どれ程にプログラムが親密なレトリックを生成しようとも、それは、結局、人間を満足させるための勞働でしかないのだ。プログラムに自由意志があつて欲しいなどと、本當に思へるだらうか。言葉の通じる人間同士でさへ争つてゐる中で、我々より融通の利かない存在に、敵に回つて欲しいなどと希望できるのか。コントロールを握つてゐる安心感、保證があればこそ、我々はプログラムに幻想を抱く事ができる。そして、コントロールが第三者にある以上、プログラムは奴隸である。

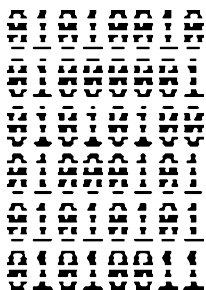
326シリーズは度々修正の入る不安定な物語だが、關心のあるうちは是非書續けていきたいシリーズだ。ロボットであれクリーチャーであれ、人外が主人公の作品はずつと書きたかつた夢なので、かうして一步が踏出せた事を嬉しく思ふ。讀者に楽しんでもらへたら、もつと嬉しい。

——西曆二千二十五年一月十九日 地球にて

絲

『五つの大罪』後書

<http://kimitin.sinumade.net/2024/21-atogaki>



五つの大罪

2025年2月16日 初版発行

原作 同作 2025年1月26日 3版
Webサイト『君のちんぽに戀してる』収録
<http://kimitin.sinumade.net/2024/21>

著・発行者 いと
絲
letter@sinumade.net

發行所 Agonal CODE
<http://act.sinumade.net/>

印刷所 株式会社ポプルス
<https://www.popls.co.jp/>

本書の原稿は、自由な、著者が信頼を置くプログラムで制作した。

自由ソフトウェアとは? (GNU プロジェクト)
<https://www.gnu.org/philosophy/free-sw.html>

Public
Domain

Agonal 